

アトリエ 琉游舎 だより 216号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年10月22日発行

菜もなき膳にあはれは知られけり
 鳴焼き茄子の秋の夕暮れ
 心なき身にもあはれは知られけり
 鳴立つ沢の秋の夕暮れ

○江戸時代の狂歌師、唐衣橘洲の狂歌と、その本歌である西行の和歌です。二つを並べる無茶は承知ですが、双方には日本精神の陰陽の伝統が表現されていると思い並べてみました。

○狂歌は食べるものがない質素な食事、食べ飽きてしまった鳴焼き茄子ばかりの哀れな秋の夕食の情景描写です。飽きと秋を掛けた駄洒落で、自らの境遇も感慨も笑い飛ばすユーモアと開き直りがしっかり古今和歌集の古典の知性に裏付けされて、江戸庶民の陽気な教養の高さを感じます。西行の歌は傑作古典であることは疑いありません。世俗の感情や執着を離れた私（西行）でも、鳴立つ沢の秋の夕暮れにしみじみとした情感を感じるんだなど、自然の美しい情景に心を揺さぶられた瞬間を詠んだものでしょう。仏教の諸行無常をもののあはれや無常感への日本的感性に結実させた、平安貴族の自己洞察の深さを観ることができます。

○明るくユーモラス、しかし自己を客観視する教養も備えた江戸庶民と、内省的で透徹した目で孤高の精神を表現する平安貴族。どちらも日本人の陰陽、表裏の両面を見せてくれた歌です。これが日本文化、精神の伝統です。決して権力維持や正当化のために単純化されて作られた伝統ではありません。ある時点の権威や社会に戻ることが保守ではなく、変遷と継承の流れを知を通してありのままに観た時に立ち現れる日本人の精神を、我が身も受け継いでいると実感すること、その精神を日本人の自覚、伝統回帰、日本文化の保守と呼ぶのです。

○私はこの狂歌と和歌の二つの精神を併せ持つ日本人でありたいと思います。そのためには日本人の精神の多様性とその足跡を知り、それが自分に受け継がれていることに喜びを覚えることです。単線化された知性なき聞き心地のよい言葉ではなく、幾つもの複線によって伝えられる多様性に溢れた伝統を次の時代に繋げるためには、それを慈しみ、理解し、ありのままに観る知と感性が要求されるでしょう。そのことによって初めて伝統が継承され、日本人の精神が保守されていくのです。

10月・11月スケジュール

		木		金		土		日	
		火		水		23		24	
						25		26	
27	28	29	30	31	11月1日	2	3	4	5
	読書会 13時半から					写経会 13時半から			
3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	読書会 13時半から								
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26

読書会

10月28日（日）
 11月11日（日）
 13時半から

写経会

11月2日（日）
 13時半から

ワークライフバランスという言葉があります。これは内閣府が2007年に策定した「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」に基づいており、仕事と私生活の両方を充実させることを意味するとのこと。昭和世代の私は常々この言葉に違和感を覚えていました。私が給与生活者だった時の実感と現在の社会が理解する仕事と生活の関係が異なっていると感じるからです。その原因は仕事と私生活を分離して考えようとするにあるのではないのでしょうか。仕事の選択と行為は私的な判断と生活の延長にあるものなのでしょう。そして私生活の延長上にある仕事は、仕事の場に立った時にプライベートからパブリックに変わります。その境目は通勤電車の中で文庫本を掲げている間に変化していくグラデーションだったかも知れませんが、家でスーツに着替えネクタイを締め、家を出た瞬間だったかも知れません。いずれにしてもその毎日は仕事と私生活を行ったり来たりしながら、互いがオーバーラップしつつも、日々を楽しく健やかに過ごすことができることを「願い、誓い、行う」ことだったのです。それは今の私の信行の日々と全く同じ毎日だったのです。

給与生活者時代の私は仕事と私生活を行ったり来たりする日々が楽しく、充実していました。恵まれた環境だったのかも知れませんが、私は仕事が辛いと感じたことは一度もありません。ましてや上司や会社から「馬車馬のように働いていただきます」とも社長自らが「私自身もワークライフバランスという言葉捨てます。働いて、働いて、働いて、働いて、働いてまいります」と発したことを聞いた記憶もありません。自ら前線に立つそぶりを見せながら、部下に突撃を命じる旧軍司令官のような言葉は、社員の自主性と創造力を損なってしまうのです。このことを理解している会社で働くことができたことは大変恵まれたことでした。

自主、自由、自立の精神に満ちた会社の労働環境も、昭和、平成と日本が成長から停滞に向かっていくに従って、労働時間や社員の健康などの労務管理がマネジメントの中心となりました。すると今まで仕事は自ら意識的に行うものと考えて実践していた社員から、働く喜びや自主性が奪われ、管理することと管理されることが日々の重要事になってしまったのです。つまりマネジメントに決められたとおりに動くことが仕事であるということです。確かに組織の命令系統から見れば、管理者から求められたことをやっていればそれ以上のことはしなくてよい、あるいはしてはいけないという立場が労働者なのでしょう。しかし、少なくとも私の所属した会社はある時期までは仕事は自ら行うべきものという行動原理によって機能していました。しかしコンプライアンス（法令遵守）やアカウンタビリティ（説明責任）、ガバナンス（企業統治・組織管理）などの経営概念がアメリカから輸入され、今までの個人の常識と倫理観によって統制されていた行動原理が、規則とマニュアルの中に押し込められてしまいました。規則に書かれた瞬間、リスクを恐れて会社も社員も挑戦を望まなくなり、安定、安全、恙ない日々を送ることが働くこと（行動原理）となってしまったのです。本来私生活がその場であったはずなのに、仕事も私生活も何処に行っても求められ望まれることは安定、安全の無難な日々です。その結果が現在の、出口の見えない閉塞感に覆われた日本です。

私の退職の間際、会社は今までの働き方を強制的に変えなければならなくなりました。それはある社員の過重労働の末の自殺に対する司法判断です。その結果、会社の行動原理であった「鬼十則」は社内から物理的にも精神的にも撤去されたのです。入社以来、常に耳と目の届くところにあり、社員すべてはこの十則

（教え）を実践すれば結果が出ると信じた行動原理です。これが昭和、平成と情報・コミュニケーション業界を先導してきた原動力です。また私が真に心身ともワークライフバランスが実現できていたと信じる日々の実践の礎なので、もはや時代錯誤の言葉と感じられるかも知れませんが、あえてここに全文を記載します。

鬼十則「仕事は自ら創るべきで、与えられるべきでない」「仕事とは、先手先手と働き掛けていくことで、受け身でやるものではない」「大きな仕事と取り組み、小さな仕事はおのれを小さくする」「難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある」「取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは……」「周囲を引きずり回せ、引きずるのと引きずられるのとでは、永い間に天地のひらきができる」「計画を持て、長期の計画を持っていれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生まれる」「自信を持て、自信がないから君の仕事には、迫力も粘りも、そして厚味すらがない」「頭は常に全回転、八方に気を配って一分の隙もあってはならぬ、サービスとはそのようなものだ」「摩擦を怖れるな、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でないと君は卑屈未練になる」

この鬼十則は時代錯誤でしょうか、パワハラでしょうか、理不尽でしょうか。私は在職中鬼十則通りに行動することを上司から要求されたことも社から指示されたこともありません。会議や集会などで唱和させられたこともありません。行動原理ですが行動を規定し指示するための言葉ではないのです。各々が自分の行動の指針とし、自発的に受入れ、自身の行動の検証・計画・実践のための道標なのです。唐突に聞こえるかも知れませんが、私の会社時代のそれは鬼十則で、僧侶になった私のそれが法華経であり日蓮聖人の言葉です。

かつて私が仕事と私生活の往来で心身バランスを保ち、楽しく安らかで豊かな日々を送ることができたのは、それを実践可能としてくれる会社への「信」があったからです。今私は僧侶と世間の間を毎日往復しながら信行の日々を送っています。それは何らかつての仕事と私生活の往来と変わりません。私が今立つ所への信がなければ、その場からの信も私は得られないでしょう。互いの信がないところでは心身のバランスも保つことはできません。まずは失われたと私が実感する社会と個の間の「信」の再興が必要だと考えます。